法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

中国におけるカント哲学の翻訳史の現状と課題

MAKINO, Eiji / 牧野, 英二

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
68
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
14
(発行年 / Year)
2014-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010047

Hosei University Repository

中国におけるカント哲学の翻訳史の現状と課題

牧　野　英　二

はじめに

本稿は，日本・韓国・中国・台湾など東アジアの漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳史・受容史を目的とする研究成果の一部である。本研究の最終的狙いは，東アジアの近代化の過程を翻訳史と不可分な学問論的な観点から再検討することによって，21 世紀における知のあり方，科学・技術と文化の影響作用史を把握するという課題にある。なぜなら，後述のように，「すべての学問は翻訳からおのおのの子を授かった」(1) からである。

ところで本稿では，研究開始初年度の中間報告の段階なので，上述の研究課題のうち，中国におけるカント哲学文献の翻訳史の現状と課題に考察範囲を限定する(2)。ちなみに，「中国哲学とヨーロッパの哲学者」との関係を扱った文献は，日本でもすでに存在している(3)。しかし，その実態は，ヨーロッパの哲学者による中国哲学の紹介および批評，孔子や老子などの中国古典の思想家のヨーロッパ語への翻訳・紹介と，ヨーロッパの哲学者と中国の古典の思想家との比較研究にとどまり，本稿の研究目的に直接参考になる先行研究は，管見のかぎり，現段階ではまだ存在しない。本稿は，その意味で，これまでの研究史における空白の一部を埋め，21 世紀のグローバル化時代にふさわしい方法と観点から，上記の研究目的を遂行しようと意図している。

周知のように，日本文化の特徴は翻訳文化にあるとも言われるほど，日本では翻訳書の出版が盛んであり，日本の近代化と特に西洋の文献の翻訳史とは不可分の関係にある。中国の翻訳文化もまた，古来，長い歴史と蓄積がある。とりわけ，清朝末期の激動の時代に母国の近代化実現のために尽力した厳復による精力的なヨーロッパ思想の中国語訳の業績を抜きにして，その後の中国の西洋文献の翻訳・紹介を語ることはできないであろう(4)。さらに明治以降，日本の近代化の過程で西洋語の文献の翻訳作業を推進するうえで，中国の言語である漢字が果たした役割の重要性もまた，学者・専門家の間では常識に属する事柄である。実際，文学・芸術の分野，特定の政治家や思想家の研究領域では，日本と中国語圏の翻訳・受容の影響作用史の研究は，戦前から多くみられてきた。このこともまた，よく知られた事実である。

ところが，21 世紀に入り，中華人民共和国は，アメリカ合衆国と並んで世界の政治・経済・金融・軍事などに強大な影響力を及ぼす大国に成長した。加えて中華人民共和国は，日本の貿易相手国としてアメリカ合衆国を超えているにもかかわらず，この隣国の西洋哲学，特に現代思想の受容やその影響に

Hosei University Repository

ついては依然としてその全貌が明らかにされていないのである。日本では，同じ漢字文化圏に属し，かつて遣隋使や遣唐使の時代以来，多くの恩恵を受けてきた中国との間には，明治以降奇妙な文化的空白が生じている。その空白を埋めるために，本稿では，「中国におけるカント哲学文献」に焦点を当てて，その全貌の解明の手掛かりとしたい[5]。

したがって，本稿の目的は，近代の西洋哲学の要諦をなし，現代思想にも依然として大きな影響を及ぼしてきたイマヌエル・カントの哲学・思想に考察範囲を限定して，「中国におけるカント哲学文献」の翻訳史から見た，中国における西洋哲学の受容史の一端を解明することにある[6]。

次に本稿の考察および論述の進め方に言及する。第一に，本稿ではカント文献の訳業を年代順に紹介し，逐次筆者による注釈と批評を加える。第二に，筆者は，その際に中国の政治的・社会的・文化的背景との関係を考慮して，ほぼ1世紀にわたるカント哲学文献の歴史を4つの時期に区分して，複眼的視野の下で概括的に考察する。第三に，それによって筆者は，21世紀の現段階での中国におけるカント哲学文献の翻訳史の現状と課題を解明する。最後に，本稿では「翻訳者の使命」という観点から，日本語版『カント全集』と中国語版『カント著作全集』との間の編集の基本方針や翻訳の理念に論点を絞り，両者の比較考察を試みる。

1. 初期の翻訳史

中国語訳『カント著作全集』[7]の編者・訳者を務めた李秋零・中国人民大学哲学院教授によれば，カント哲学文献の最初の中国語訳書は，中国人の周遅とドイツ人の Wilhelm との共訳書『人心能力論』（上海，商務印書館，1914年）である。もっとも，この書物は，カントによる哲学専門書ではなく，カントが友人の医師フーフェラントに宛て養生について執筆した書簡である。長年カント研究および翻訳に専心してきた李秋零教授もまた，自身がこの書物の現物を見たことがないので，その詳細は依然として不明である[8]。

筆者は，上記の李説に幾つかの疑問を感じた。そこで筆者は，李秋零教授に対して若干の質問とともに，筆者の次のような解釈を主張した。第一に，この翻訳書は，数編あるカントのフーフェラント宛書簡のうち，1798年2月6日付のきわめて短い書簡の翻訳そのものだけでなく，この書簡とともにフーフェラント宛に送ったカントの論文『心性の力について云々』である可能性が高い[9]。第二に，この解釈が正しいとすれば，この論文は，カント自身が執筆した最後の著作『諸学部の争い（Der Streit der Fakultäten）』の第三部「哲学部と医学部との争い」（Der Streit der philosophischen Fakultät mit der medizinischen）として，1798年晩秋に刊行された書物である。第三に，中国語訳の底本は，アカデミー版『カント全集』ではなく，『諸学部の争い』の廉価版（Kants Werke, Studienausgabe, 1902）ではないか。ちなみに，アカデミー版『カント全集』第7巻に収録された『諸学部の争い』は，1917年の刊行である。第四に，なぜ1914年にカントのこの文献が最初に中国語に翻訳されたのか。なぜ，カントの主著である『純粋理性批判』などの三批判書が最初に訳されなかったのだろうか。

Hosei University Repository

ちなみに，中国では，1911 年に辛亥革命が起こり，清帝国が滅亡し，1912 年 1 月には孫文が中心となって中華民国が成立した。その 2 年後の激動の時期に，この訳書が刊行された理由としてはどのようなことが考えられるのだろうか。中国人とドイツ人の二人の訳者が，この時期に敢えてこの論考を翻訳し出版した意図は，どこにあったのであろうか。翻訳活動もまた，歴史の中で生きる人間の知的営みであるかぎり，この書物の翻訳当時の歴史的・社会的・文化的な背景との関係について，読者はどのように考えるべきだろうか。

上記の筆者の問題提起に対する李秋零教授の回答およびコメントは，以下のとおりであった。第一に，上記の第一から第三の論点にかんする牧野説には賛成である。たしかに牧野説の推測は妥当である，と思われる。第二に，上記の第四の質問については，当時の中国ではカント哲学がまだ知られていなかった。訳者たちは，医学に関心があったことが推測される。それでこの書物を訳したのであろう。李教授によれば，カントの医学的な養生の見解には，中国の道教の教えと同様の見解が見られるからである。最後に補足すれば，1914 年から中国語の現代文化活動が活発化した。それまでの中国語は，漢語と現代文とが混在しており，中国語としての訳語の正確さも不明確である。いずれにしても，本書の現物は，目下のところ，見ることができない状態なので，これ以上の説明は困難である。

以上が筆者と李秋零教授との議論の結果，明らかになった論点である。特に肝要なことは，今回の共同研究によって，従来の中国での通説とは異なり，中国におけるカントの哲学書の翻訳は，1914 年から開始されたことが確認されたという点にある。加えて，この時期にカント哲学文献の中国語訳が開始され，その出版社が首都・北京の出版社ではなく，上海の商務印書館であったことは，後述のように中国の近代化の象徴的な出来事であった。

2. 文化大革命期まで

20 世紀の 20 年代と 30 年代になり，中国では，ようやくカントの主著の翻訳書の刊行が開始された。ただし，最初の刊行は，講義録の翻訳であった。瞿菊農訳『カント教育学』（上海，商務印書館，1926 年）である。続いて，同じ出版社から胡仁源訳『純粋理性批判』（上海，商務印書館，1931 年）が，『万有文庫』に収録されて刊行されている。また張銘鼎訳『実践理性批判』（上海，商務印書館，1936 年）が刊行され，唐鉞訳『人倫の形而上学の基礎づけ』（上海，商務印書館，1939 年）もまた，上海の同じ出版社から出版されている。他に前批判期の著作としては，関文運訳『美と崇高の感情に関する観察』（上海，商務印書館，1941 年）が出版されている[(10)]。

この時期の中国では，第一次世界大戦終結後間もなく，その後 1937 年 7 月から 1945 年 8 月まで日中戦争が続き，国民の疲弊と国土の荒廃の中で，こうした翻訳書が断続的とはいえ，続いたことは驚くべきことである。特にカントの著作が三批判書の翻訳に先立って教育学の講義録から刊行されたことは，当時の知識人のカント哲学へのある種の期待を想起させる意味で示唆的である。特に，20 年代以降の上海は，北京をも凌ぐ出版文化の中心地となった。20 年代後半には，国民党による中国統一が成功し，

Hosei University Repository

蒋介石は一党独裁体制下で経済基盤の構築を進め，上海が新中国の中心となって繁栄の絶頂に至る。文学研究者も指摘するように，新聞雑誌の発行量も急増し，文芸を愛好する知識層・市民層が増大し，職業作家，職業批評家が陸続と登場した[11]。カント哲学書の翻訳紹介の刊行拠点が上海に集中し，同じ商務印書館という出版社から順次刊行された事実もまた，こうした時代状況や文芸活動の流れと深く結び付いている，とみてよいであろう。ちなみに，この出版社は，1897年にキリスト教会の影響下に中国人の手で設立され，西洋の文献の翻訳・紹介に精力的に取り組んだ出版社であり，1954年には，活動拠点を上海から北京に移している。中国の西洋思想の翻訳史および受容史は，この出版社の存在を抜きに語ることはできないであろう。

ところで中国は，第二次世界大戦の終結に続く国民党と共産党との内戦，そして1949年10月1日の中華人民共和国の成立後，1966年に開始され77年に終結した文化大革命の過程では，政治・経済・文化・教育の諸分野でも大打撃を受けた。その負の影響のために，カントの翻訳書出版の実績もほとんど見られない。文化大革命開始までの10年の間に，藍公武訳『純粋理性批判』（北京，三聯書店，1957年。商務印書館，1960年），関文運訳『実践理性批判』（北京，商務印書館，1960年），葦卓民訳『カント哲学原著選集』（John Watson選・編，北京，商務印書館，1963年），宗白華訳『判断力批判』（上），葦卓民訳『判断力批判』（下）（上下巻ともに北京，商務印書館，1964年）が出版されている。文化大革命までの5年ほどの短い時期に，初めての中国語訳『判断力批判』が刊行され，ここにようやく三批判書の翻訳書が揃ったのである。ちなみに，日本における三批判書の翻訳は，『カント著作集』（岩波書店，1918–37年）に収録されるかたちで，『純粋理性批判』（天野貞祐訳，上巻，1921年，下巻，1931年），『実践理性批判』（波多野精一・宮本和吉訳，1918年），『判断力批判』（大西克礼訳，1932年）の全訳が順次刊行されている。

なお，文化大革命の時期に刊行された唯一のカント書は，上海外国自然科学哲学著作編訳班訳『天界の一般自然史と理論』（上海，上海人民出版社，1972年）だけのようである。この時期に，カント・ラプラス星雲説で名高いこの書物の翻訳だけが刊行された狙いは，どこにあったのであろうか。また，この書物の翻訳が個人訳ではなく，カントの翻訳では例外的にグループでの共同訳であったことも，この翻訳のある種の意図を窺わせている。

3. 文化大革命以後の状況

カントの著作の翻訳活動は，文化大革命の終結とともにただちに再開された。まず，龐景仁訳『学として現れるであろうあらゆる将来の形而上学のためのプロレゴーメナ』（北京，商務印書館，1978年）が刊行された。この翻訳は，カントのこの書物の中国語訳の初訳である。1980年代に入ると，カント文献の翻訳活動は活発化し，1990年代になるとヘーゲル哲学以上にカント哲学への関心が高まり，翻訳書の刊行もいっそう盛んになったようである。

まず，苗力田訳『人倫の形而上学の基礎づけ』（上海，上海人民出版社，1986年），鄧晩芒訳『実用

Hosei University Repository

的観点における人間学』（重慶，重慶出版社，1987 年），鄧暁芒訳『自然科学の形而上学的原理』（上海，上海人民出版社，1988 年），曹俊峰・韓明安訳『美と崇高の感情に関する観察』（ハルビン，黒竜江人民出版社，1989 年）が出版されている。また葦卓民訳による『自然科学の形而上学的原理』（武漢，華中師範大学出版社，1991 年）も刊行されている。さらに許景行訳『論理学』（北京，商務印書館，1991 年）や何兆武編訳『歴史理性批判論文集』（北京，商務印書館，1990 年）は，中国語訳の初訳であり，沈叔平訳『人倫の形而上学』（北京，商務印書館，1991 年）は，カントのこの書物の前半部分，すなわち法論だけの翻訳であり，徳論は訳出されていない。李秋零訳編『カントの書簡 100 通』（上海，上海人民出版社，1992 年），鄭保華編『カント論文集』（北京，改革出版社，1997 年），李秋零訳『単なる理性の限界内の宗教』（香港，漢語基督教文化研究所，1997 年。北京，中国人民大学出版社，2003 年），さらに韓水法訳『実践理性批判』（北京，商務印書館，1999 年），など，この時期の翻訳活動の成果は，文化大革命期の学問研究の空白を埋めようとする意欲に溢れ，まことに目覚ましいものがある。

上掲の李秋零訳編によるカント書簡集および宗教論の刊行は，カント哲学への関心とカント研究の進展を物語っている，と言ってよい。特に，共産主義を国是とし，宗教をアヘンとして厳しく批判してきた中国は，改革・開放路線の影響により，政治と切り離して学問としての宗教論研究が，宗教の自由とともに公然と認められるようになり，その結果，カントの宗教論の翻訳刊行もまた公認されるようになった。

21 世紀に入り，現代思想の受容に精力的な中国の哲学・思想界の中でも，古典に属するカントの翻訳書の刊行熱は，依然として収まることがなかった。楊祖陶，鄧暁芒編訳『カント三批判書の本質』（北京，人民出版社，2001 年），瑜青編『カント主要論文集』（上海，上海大学出版社，2002 年），鄧暁芒訳，楊祖陶校正『判断力批判』（北京，人民出版社，2002 年），同じく鄧暁芒訳，楊祖陶校正『実践理性批判』（北京，人民出版社，2003 年），曹俊峰訳『カント美学論集』（北京，北京師範大学出版社，2003 年）など，ほぼ毎年数冊のペースで翻訳書が刊行されている。

ところで，この時期の台湾におけるカント哲学文献の翻訳活動にも，目を向けることが肝要である。まず，謝扶雅訳『カントの道徳哲学』（台北，基督教文芸出版社，1960 年）がいち早く訳され，この訳書の第三版（1986 年）は，『基督教歴代名著集成』に収録されている。新儒家の代表者でもある牟宗三による訳注『カントの道徳哲学』（台北，学生書局，1982 年）と，同じく牟宗三訳注『カントの純粋理性批判』（上下，台北，学生書局，1983 年）は，たんなる翻訳ではなく，注釈書と見た方がよい。また李明輝訳『視霊者の夢』（台北，聯経出版事業公司，1989 年），そして李明輝訳『人倫の形而上学の基礎づけ』（台北，聯経出版事業公司，1990 年），さらに李明輝訳『カント歴史哲学論集』（台北，聯経出版事業公司，2002 年）などの訳業は，見逃すことができない。かつて，カントの道徳神学・宗教論が母国では無神論の疑いをかけられ，オーストリアのウイーンなどでは焚書にされた事実を思い起こす時，特に台湾では，カントの道徳哲学がキリスト教関係者により翻訳され，刊行された事実は興味深いことである。台湾では，共産党との内戦に敗北した国民党政権が 1949 年に中国本土を離れ，政権基盤を台湾に移し，1960 年以降，急速な経済成長を遂げた。上記の翻訳は，その早い段階での翻訳刊行である

Hosei University Repository

だけに，その意図は読者の関心を引くところである。

4. カント没後200年

2004年には，カント没後200年を記念して，グローバルな規模でカント哲学の歴史的・今日的意義を問い直す行事が多数実施された。この行事の意義や課題については，稿を改めて扱う予定なので，ここでは立ち入ることはできないが，中国でも，欧米から第一級の哲学者やカント研究者を多数招き，さまざまな行事が行われた事実を指摘しておきたい。それに伴い，カント哲学文献の翻訳についても，特筆すべき事柄を幾つか指摘することができる。

まず，鄧曉芒訳，楊祖陶校正『純粋理性批判』（北京，人民出版社，2004年），李秋零訳『純粋理性批判』（北京，中国人民大学出版社，2004年）によるカントの主著の翻訳に続いて，李秋零編集・訳による中国語版『カント著作全集』（全9巻，北京，中国人民大学出版社，2003-2010年）の刊行が開始され，2010年に完結した。この企画は，中国・台湾，そして韓国などの漢字文化圏では，上記の岩波版『カント著作集』に続く快挙である，と言ってよい。李秋零教授によれば，この『カント著作全集』の編集方針は，もっぱらアカデミー版『カント全集』に依拠して，本全集の収録順にカントの既刊の諸論考を正確に翻訳することにある。したがって，日本語版『カント著作集』や『カント全集』のように訳注や訳者解説の類は一切加えておらず，カッシーラー版『カント全集』などの他の諸版との比較やテクスト・クリティークも行っていない。さらに中国語訳では，底本にしたアカデミー版各巻の編者の序文も訳出している。このような編集方針には，日本語版『カント全集』の編集・翻訳を担当した筆者が見る限り，問題がないわけではない。この問題については，後述する予定であるので，ここでは立ち入らないことにする(12)。

次に，中国のカント文献の翻訳史上画期的な業績である中国語版『カント著作全集』の内容を紹介する。第1巻は『前批判期著作Ⅰ』（2003年），第2巻は『前批判期著作Ⅱ』（2004年），第3巻は『純粋理性批判』第二版（2004年），第4巻は『純粋理性批判』第一版（2005年），『人倫の形而上学の基礎づけ』，『自然科学の形而上学的原理』である。第5巻は『実践理性批判』，『判断力批判』（2005年），第6巻は『単なる理性の限界内の宗教』，『人倫の形而上学　法論・徳論』（2006年），第7巻は『諸学部の争い』，『実用的観点からの人間学』（2007年），第8巻は『1781年以降の諸論考』（2008年），第9巻は『論理学』，『自然地理学』，『教育学』（2010年）の講義の刊行により，全9巻をもって完結した。中国語版『カント著作全集』は，第1巻を除き，第2巻以降は，実質上，李秋零教授個人による編集・翻訳による偉業というべき業績であった。

5. 中国語訳カント哲学文献の訳文・訳語の問題点と課題

上記のように，中国語版『カント著作全集』の刊行が完結したことによって，カント哲学文献の中国

Hosei University Repository

語訳は出揃ったことになる。また，カントの主要著作では『純粋理性批判』の訳書は5点あり，『実践理性批判』および『人倫の形而上学の基礎づけ』の訳書は7点が刊行されている。

こうした状況で問題となるのは，第一に，各訳書の翻訳の正確性である。李教授の見解によれば，胡仁源訳，藍公武訳，牟宗三訳，葦卓民訳らによる早い時期の『純粋理性批判』の翻訳は，彼らが語学力の不足から，原典のドイツ語が十分読めないために，英訳書からの重訳であった。その結果，原文の論述内容に反するような誤訳や英訳書の誤りの反復もしばしばみられる。また，第二に，訳文の文体についても，藍公武訳や牟宗三訳では，半ば文語体，半ば口語体で訳されており，現代の中国語との隔たりが大きいという問題点がある。第三に，宗白華訳『判断力批判』（上）および葦卓民訳『判断力批判』（下）に対しても，事情は同様であり，何兆武による宗白華訳および葦卓民訳に対する批判は，「最後まで読むに堪えない」誤りの多い訳書であるという厳しいものであった。

次の問題は，カント哲学の主要な概念・術語の訳語選択にかんする課題である。李教授によれば，カントの術語に完全に対応する訳語が見当たらないものもある。また，訳者ごとにカント哲学に対する理解の相違もあり，ドイツ語の一つの術語に対して中国語訳の複数の訳語が併存しているのが実情である。例えば，「アプリオリ（a priori）」という語に対しては，「先天」，「先験」，「験前」などと訳されている。またカント自身が明確に区別して使用した「現象（Erscheinung）」と「フェノメノン（Phaenomenon）」は，藍公武訳ではいずれも「現象」と訳され，葦卓民訳では「出現」と「現象」，鄧曉芒訳では「現象」と「現相」，李秋零訳では「現像」と「現象」というように，多様な訳語が使われている。関文運訳『実践理性批判』では，「傾向性（Neigung）」が「好悪」，「好み」，「嗜好」，「情欲」など，さまざまに訳されており，訳者は総じて訳語の統一に無頓着である。他のカント哲学文献の訳語についても，同様の事情にある。加えて，李秋零説によれば，牟宗三訳では，「最高善（das höchste Gute）」が「至善」と訳されている。この訳語は完全に誤訳である。その理由として李教授は，新儒家の訳者が儒教・仏教の用語を無反省に混同し訳語として採用した点を指摘している。筆者のみるところ，こうした訳文や訳語にかんする問題は，必ずしもすべてが中国語訳に固有の問題とは言えず，多くは日本語訳などとも共通の課題である。ちなみに，創文社版『ハイデッガー全集』におけるハイデガーの論考で見られる不可解な訳語の選択と全集版における訳語の統一方針が不在であるように思われる事態は，上記の事態とアナロガスであるように感じたのは筆者だけであろうか。

さらに西洋語の漢字表記の制約という中国語訳特有の問題がある。日本語には，中国語にはないカタカナ表記がある。西洋の人名や事項・地名の表記には，しばしばこの表記方法が威力を発揮する。他方，中国語訳には，漢字以外のカタカナ表記がないので，西洋の人名や事項・地名の表記は，すべて漢字で表記しなければならない。その点は中国訳の弱点ともいえる（台湾の翻訳方法については，やや異なる事情にあるので，研究史と併せて別稿に譲る）。李教授によれば，『カント著作全集』の中で最も翻訳に苦労した著作は，『自然地理学』であった。この書物には，膨大な数の人名や地名が収録されている。18世紀のカントの時代に使われた地名の表記が今日では「消滅」したり，別の地名に「名称変更」した例もあり，加えて，事実関係も確認困難なラテン語表記の地名などについては，そのままで表記せざ

Hosei University Repository

るをいなかった，という。

他方，近年の日本語訳書にみられるカタカナ表記の多用は，達意の日本語訳とは程遠い訳文が少なくなく，正確な日本語に訳出できない訳者の非力を誤魔化すための方便に使用される場合も多いように思われる。その傾向は，近年マスコミによって作り出されたブームの「超訳」ものに顕著である。その点では，中国語訳は，カタカナ表記がないがゆえに，却って正確な内容理解に基づく漢字による翻訳とその表記が求められるわけである。

最後に，中国語版『カント著作全集』の制限および今後の課題というべき事柄について，若干言及しておきたい。本『カント著作全集』は，上述のようにアカデミー版『カント全集』の忠実な訳出作業に即するという方針によっているため，少数の人名索引を除き事項索引や訳注・校訂注などが付せられていない。その理由により結果的に，一般の読者には，日本語版『カント全集』のような読者の便宜などはいっさい考慮しない翻訳書の体裁になっている。また，『カント・フォルシュンゲン』（*Kant-Forschungen*）に掲載された最新のテクスト・クリティークや新資料の調査結果などはまったく活用されていない。これらの点は，今後改善すべき課題であろう。それにしても，膨大な『カント著作全集』を実質的にほぼ個人訳で完結させ，加えて，書簡集もまた全訳を個人訳で完結させようという試みは，訳者の意気込みには大いに共鳴するが，学問的に見て，いささか無謀な印象を禁じることができない。全国規模学会を構築できない社会的・学問的・大学組織上の事情があるにしても，これらの課題を克服することは，中国における学問の進歩や共同研究および学問的継承の実現のために，不可避の課題であろう。台湾のカント研究者もまた，筆者と同様の見解を有しているが，この点についても，詳しくは別稿に譲る。

6. 翻訳者の使命について

この機会に筆者は，日本語版『カント全集』（岩波書店版）の編集・校閲・訳者を務めた経験から，カント哲学文献の日本語訳にかんする「翻訳者の使命」ないし翻訳の役割および意義について，立ち入っておきたい。それによって，中国語版『カント著作全集』との相違および後者の今後の課題がいっそう鮮明になるはずである。そこで，まず，筆者の理解する望ましい翻訳のあり方に触れ，次に，翻訳者の使命を明らかにし，最後に，それらとカント哲学の理解と研究との関連に立ち入ることにする。

第一に，筆者の考える望ましい「翻訳」とは，たんに原作ないし原文の忠実な逐語的再現ではないという点にある。この点では，筆者は「直訳主義」を批判する立場に立つ，と言ってよい。第二に，だからといって「翻訳」は訳者の自由な創作であってもならない，と筆者は考える。翻訳文化の顕著な日本では，「反直訳主義」を標榜して「わかりやすい訳」という「大義名分」のもとに「超訳」とも言うべき恣意的な翻訳が稀ではない[13]。いわゆる「超訳」ブームは，古典の翻訳の本来のあり方とは対極に位置する。第三に，「翻訳者の使命」は，「原典のこだま（das Echo des Originals）を呼びさまそうとする志向と，その言語への志向とを重ねる」[14] ところにあり，ヴァルター・ベンヤミンは，この点に創作

Hosei University Repository

と翻訳との本質的な差異を見いだしていた。言い換えれば，翻訳者は，「原文の新たな生（das Leben）」を包括的に展開できなければならない。原作は，通常の解釈とは異なり，翻訳を通じて新たな生を包括的に展開可能となる。翻訳は，それ独自の力によって，原作に新たな生の息吹を与えるのである。このことは，翻訳作業での原典の文章および術語との関係理解にとって重要な示唆を与えている。

筆者は，上記のベンヤミンの見解を踏まえて，さらに次のように主張したい。第一に，「翻訳」とは，訳者が原典とともに「真理」または「真理の力」を求める探究でなければならない。第二に，翻訳者は，直訳主義か，それとも意訳主義ないし通俗性の立場を採るかという二者択一の選択を迫られているわけではない。そもそもこうした対立は，「翻訳」にとって本質的に重要な対立ではない。訳文・訳語の厳密性と平明さや通俗性とは必ずしも矛盾するわけではなく，実は両者はともに必要なのである。筆者が『カント全集』および『ディルタイ全集』の企画・編集・翻訳の過程で，「哲学書の翻訳は，達意の日本語でなければならない」と一貫して主張してきた理由は，この点にある。第三に，「翻訳者の使命」は，したがって原作ないし原典の思想内容の「忠実に逐語的再現」を意図することではない。むしろ，それは，ベンヤミンの表現に即して言えば，原作の生の新たな最終的で最も包括的な展開を実現すべきである。

あるべき「翻訳の基準」の要件として個々の訳語や術語に拘るのは，それが「翻訳」されるべき哲学者・思想家の著作の的確な理解にとって不可欠であり，それは原典や原作の文脈全体の理解と個々の訳語の理解とが解釈学的循環構造を形成していることを適切に把握することが必要だからである。要するに，望ましい「翻訳」とその理解は，「要素主義」とは異なり，「生」をモデルにした作品ないし原典を全体的に理解する解釈学的性格をもっているのである。

この見解は，『純粋理性批判』をはじめとするカントの主要著作の「翻訳」にもそのまま妥当する。この営みは，これらの書物の翻訳に携わる「翻訳者の使命」とも言うべきである。筆者のこの解釈は，決して恣意的な独断的見解ではない。そこで最後に，アカデミー版『カント全集』の最大の功労者とも言うべき編集委員長を務めたディルタイによる『カント全集』の編集方針を手がかりにして，カント研究とその発展にとって全集の果たす役割について考察する[15]。

ヴィルヘルム・ディルタイは，アカデミー版『カント全集』第一巻の「序文」で「偉大な思想家の発展史は，彼らの体系を照らし出し，人間精神の理解にとって不可欠の基礎である」（Ⅰ，Ⅷ），と本全集の編集方針を自身の精神科学の基礎づけと関連付けて論じている。ここには，カントをはじめとする優れた個性の理解が人間精神の歴史の理解でもあり，精神史の理解のために不可欠であるという洞察がみられる。また，ディルタイのこの見解の基礎には，個人，共同体，人類を歴史的存在として普遍史的な立場から理解可能であるという認識があった。ハンス-ゲオルグ・ガーダマーが編集・加筆したディルタイの『一般哲学史要綱』の序文では，いわゆる「一般哲学史」での「一般」（allgemein）は，厳密には「普遍史的」（universalgeschichtlich）を意味しており，したがってこれは「文献学的-伝記的」（literarisch-biographisch）な性格を有する，と主張する[16]。また，この書物によれば，「普遍史的考察方法」によって哲学史を叙述するためには，その哲学者が生きた時代の歴史的・社会的現実に迫り，

Hosei University Repository

その人間全体を包括的に捉えることが求められる。それには，哲学者の刊行した書物だけでなく，彼の生き方を窺わせる日記，思索の記録である書簡，遺稿類，講義ノートなどの「解釈」が不可欠である。

上記の理由から，ディルタイが中心になって編集し刊行したアカデミー版『カント全集』は，第一部「既刊の著作類」，第二部「往復書簡集」，第三部「未刊の遺稿類」，第四部「講義録」の四部で構成されたのである。ちなみに，日本語版『カント全集』（岩波書店版）の編集方針もまた，ディルタイの編集方針を維持しながら，最新の資料やテクスト・クリティークの成果を組み込んでいる(17)。他方，中国語版『カント著作全集』の編集は，その名の通り，アカデミー版『カント全集』の第一部だけの翻訳出版である。もっとも，李教授によれば，目下，アカデミー版『カント全集』の第二部「書簡集」の全巻を個人訳で取り組んでいる，とのことであった。

おわりに

ところで上記のディルタイの見解は，本稿の議論と関係づけるとき，きわめて重要な示唆を提供する。第一に，他の言語圏・文化圏で思索する哲学者の研究を進めるためには，とりわけその思想や体系の包括的な理解のためには，全集の翻訳・刊行が必要不可欠である。第二に，日本や中国などでカントの哲学思想や特定の見解を適切に理解する場合には，これらの資料全体のなかで，カントの哲学的思索の生成と構造，発展と変化の過程を的確に表現しうる上記のような「翻訳」の仕方が必要であり，それは「翻訳者の使命」に属する。第三に，これらの「翻訳者の使命」は，汲めども尽きぬカントの思想に「新たな生」を与えることを可能にする「翻訳」をつねに継続しなければならない。第四に，こうした営みは，カント研究の成果を踏まえた「翻訳」の営みでなければならず，訳語の選択についても，その例外ではない。カントの文献は，その後の歴史的・社会的・文化的な変化にもかかわらず，時代を超えて翻訳者と読者の生きる歴史的・社会的現実のなかで，くり返し翻訳され直され，読み直されることによって，「新たな生」を獲得する。ベンヤミンもまた，「そこから哲学者には，歴史のより包括的な生からすべての自然的な生を理解することが課題となる」（S. 52 : p. 73），と述べている。ベンヤミンの主張には，筆者の生きる地平や生活環境，歴史的・社会的現実と大きな違いや異質さが見られる。そうした文化的な差異や歴史的・社会的な相違などを考慮してもなお，筆者は，ベンヤミンのこの見解に賛同する。

『カント全集』の翻訳上の意義は，これらの点に見いだすことができる。「翻訳」と「翻訳者の使命」は，グローバル化の時代に顕著となってきた普遍主義的言説と相対主義的言説の間で思索することを要求し，非自文化中心主義的な翻訳理論の必要性や，翻訳の可能性／不可能性の課題や翻訳者の倫理の問題にも直面している(18)。こうした状況のなかで，カント哲学を研究する者は，漢字文化圏のカント哲学文献の翻訳の際にも，ベンヤミンが提起した「翻訳者の使命」を見失うことなく，「真理の力」を発揮するよう努めることが肝要である。これらの要請は，「すべての学問は翻訳からおのおのの子を授かった」，現代の諸学問の不可避の課題に属する。

Hosei University Repository

注

（1） アントワーヌ・ベルマン『他者という試練　ロマン主義ドイツの文化と翻訳』（みすず書房，藤田省一訳，2008年，p.382. 原著1984年）。ベルマンも指摘するように「翻訳史を各言語・文化・文学の歴史 ── もっというと宗教や国民の歴史とさえ ── 切り離すのは不可能である」（p.11）。それに加えて筆者は，本文で言及しているように翻訳史の理解には，政治的・社会的文脈との関係に特に留意すべきである，と主張したい。漢字文化圏におけるカント哲学文献の翻訳史においても，この点は顕著である。ちなみに，ベルマンによる翻訳論および学問論的な文脈での「他者」や「抵抗」，さらには「言語諸科学のコペルニクス的転回」の見解には，筆者は基本的に賛同する。しかし，ベルマンは，「翻訳の領域においてフランスが今なお，ドイツやアングロ＝サクソン諸国，ソビエト連邦［ママ］，東側諸国といった国々にひときわ遅れをとっている」（p.392f.）という西洋的観点に制約されている点を筆者は指摘したい。今日では，こうした西洋文化圏の「うちの他者」を超えたオリエントやアジア文化圏という他者，さらにその内部での他者での翻訳と危機の問題に，21世紀に生きる人間は直面しているからである。

（2） 本稿で筆者が扱う「中国におけるカント哲学文献」の範囲については，読者に若干の留意を促しておきたい。本稿では考察の範囲としては，1912年の中華民国の成立前後，1949年に成立した中華人民共和国や香港・台湾なども含む。また，厳密に言えば，東アジアの漢字文化圏には，現在のベトナム社会主義共和国も含まれるが，本稿では，近代化の過程で漢字文化から離脱した事情なども考慮して，ベトナムを考察対象から除外したことを予めお断りしておく。

（3） 例えば，堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者』（明治書院，上：1996年，下：2002年）を参照。本書の著者が中国古典学の研究者として，ヨーロッパの哲学者との関連や影響関係や比較研究に取り組んだ努力に筆者は敬意を表し，その熱意を評価したいと思う。しかし，本書では，著者自身も述べているように，もっぱら実証的・文献学的に「ヨーロッパの哲学者の中国哲学観の変遷を，具体的に検討する作業に進む」（p.8）ことを目指しており，筆者自身の「日本語」で思索する研究者の立場への学問的・方法的自覚を窺うことができない。さらに本書は，翻訳史の意義についても立ち入っていないのである。本稿は，これらの問題点を補う意味も有している。

（4） 永田圭介『厳復　富国強兵に挑んだ清朝末期思想家』（東方書店，2011年，第8章，pp.176-223.）厳復の次世代に属する思想家としては，梁漱溟の名を忘れてはならないであろう。1883年生まれの彼は，中国思想と外来思想との統合・比較などを試みた優れた哲学者・思想家である。主著『東西文化とその哲学』（アジア問題研究会編，長谷部茂訳，農文協，2000年，p.97。ただし，原著は1987年刊行）では，カントの名前とともにその評価がきわめて簡潔に積極的に綴られている。

（5） 最近の中華人民共和国における現代思想の受容史の紹介については，次の文献が参考になる。王前『中国が読んだ現代思想　サルトルからデリダ，シュミット，ロールズまで』（講談社，2011年）。もっとも，本書の性格上，カント哲学の影響にはまったく触れていない，と言ってよい。本稿は，その欠を補うことも意図している。

（6） 例えば，日本では「翻訳事情から」ハイデガー研究者として知られているトム・ロックモアは，英語圏における優れたカント以降のドイツ哲学の研究者である。彼は，『カントの航跡のなかで　二十世紀の哲学』（牧野英二監訳・齋藤元紀・相原博・平井雅人・松井賢太郎・近堂秀訳，法政大学出版局，2008年，原著2006年，p.3. および監訳者によるあとがきを参照）では，20世紀の4つの思想運動として，第一にアメリカ・プラグマティズム，第二にマルクス主義，第三に大陸の現象学，第四にアングロ＝アメリカの分析哲学を挙げ，そのすべてが依然としてカント哲学と深いかかわりがあることを明らかにしている。筆者もまた，ロックモア説に基本的に賛成である。この観点は，東アジアの漢字文化圏のカント研究についても妥当する。

（7）『康徳著作全集』（中国人民大学出版社，2003-2010年，李秋零編集・翻訳）。なお，第二巻以降は，李教授によれば，同教授の個人訳である。詳しくは，本文で後述する。

（8） 以下の中国におけるカント哲学文献にかんする詳細は，2012年7月30日および31日の両日に中国・北京市の中国人民大学哲学院にある李秋零教授の研究室を訪れ，筆者と李教授との2日間にわたる共同研究および

Hosei University Repository

資料調査の成果である。その際，李教授から翻訳文献資料「康徳哲学」の提供を受けた。本稿掲載の基礎資料の多くは，本資料に負っている。したがって，2011年以降の文献収録が不十分であることをお断りしておく。

（9） フーフェラント（Christoph Wilhelm Hufeland, 1762–1836）は，イェーナ大学およびゲッティンゲン大学で学び，ヴァイマールで医師として開業した。著名な医師として彼の患者には，ゲーテやシラーも含まれていた。イェーナ大学教授を務め，晩年のカントとの文通も数回行われている。ちなみに，カントのフーフェラント宛書簡は，『アカデミー版カント全集』には3通収録されており，本文で言及した書簡は，フーフェラント宛の最後の書簡にあたる。なお，『心性の力について云々』は，正確には，『病的な感情を支配しようとするたんなる意図による心性の力について』（Von der Macht des Gemüts durch den blossen Vorsatz seiner krankhaften Gefühle Meister zu sein, 1798.）である。本論文は，フーフェラントが刊行にかかわっていた『実用医学雑誌』（*Journal der praktischen Arzneikunde*, V. Bd. 4 Stueck）に掲載された。彼の主著（*Encheiridon medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis*, 1836.）は，そのオランダ語訳が緒方洪庵により邦訳書『扶氏医戒之略』（1857）を刊行しており，この点でも日本との縁が見られる。

（10） 本稿でのカントの主要著作の邦訳名は，原則として岩波版『カント全集』（坂部恵・有福孝岳・牧野英二編，全23巻，1999–2006年）に従っている。

（11） 藤井省三『中国語圏文学史』（東京大学出版会，2012年，p. 5.）の論述を参照。

（12） 筆者は，岩波版『カント全集』の企画・編集および翻訳作業に携わった人間として，西洋哲学・思想の翻訳のあり方について，詳しく論じたことがある。この点については，以下の本文を参照されたい。ちなみに，「6. 翻訳者の使命について」は，次の拙論の論述と一部重複することをお断りしておく。牧野英二「カント研究と翻訳者の使命」（日本カント協会編『日本カント研究』9号，理想社，2008年，pp. 91–106.）。

（13） 筆者の近年の翻訳経験では，共同の訳業のなかで，ある訳者が既訳書との差異化や独創性を出そうとして，「観察［観測］誤差」（Beobachtungsfehler）を「観察の誤り」とするような「文学的な砕き方の優位性」を主張する翻訳方針に遭遇したことがある。「観察誤差」は，科学的術語として，ある量の測定値と真の値との差を表わす言葉である。したがって，「観察の際の誤り」では決してない。この種の翻訳の「砕き方」が分かりやすい訳であり，「観察誤差」と訳すのは「直訳主義」であるとの誤解は，論外である。ちなみに，「わかりやすさ」とは何かをめぐって，当然のことながら解釈の相違が生じるが，本稿ではこの問題に立ち入ることはできない。

（14） Walter Benjamin, *Sprache und Geschichte. Philosophische Essays*, Stuttgart 2005, S. 50–65. なお，邦訳は，ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論他十篇』（野村修編訳，岩波文庫）を参照した。但し，論文タイトルおよび本文の訳語は一部変更を加えたことをお断わりしておく。引用に際しては，原則として本文中に上掲のドイツ語テクストと訳書の頁数を記した。また本稿では，ベンヤミンの思想の「解釈」や紹介は主題ではないので，本考察の範囲から除外する。したがって彼の「言語の形而上学と翻訳概念」との連関や，「純粋言語論」の意味には一切立ち入らず，もっぱら本稿の主題を考察するための手がかりとして，彼の「翻訳」および「翻訳者の使命」に言及するだけにとどめる。

ちなみに，グローバル化した現代社会では「翻訳」の意義や役割，課題や問題点などがかつての想像を超えて生じている。ベンヤミンの本論考の Aufgabe の英語訳は，Task であり，ここにドイツ語，英語，日本語間の微妙な意味のズレが生じている。なお，ベンヤミンの時代には顕在化しなかった「翻訳の倫理」などの諸課題については，以下の文献が参考になる。Cf. S. Bermann & M. Wood（eds.): *Nation, Languege, and the Ethics of Translation*, Princeton University Press p. 65, pp. 89–174（2005）.

（15） ちなみに，日本の哲学者では三木清だけでなく，和辻哲郎，西田幾多郎もまた，ディルタイの解釈学に深い理解を示し，その重要性を認識していた。三木清は，「個性の理解」，「解釈学的現象学の基礎」，「ディルタイの解釈学」などの論考を発表している。また，和辻哲郎は，『人間の学としての倫理学』などでも，ハイデガーの解釈学よりもディルタイの解釈学の方法を重視している。

（16） Vgl. Wilhelm Dilthey, *Grundriss der allgemeinen Geschichte der Philosophie*, Wiesbaden 1949, S. 12. 牧野英二編集・校閲『精神科学序説Ⅰ』（『ディルタイ全集』第1巻，法政大学出版局，2006年），筆者による「解説」（pp. 831ff.）を参照。

Hosei University Repository

(17) 岩波版『カント全集』の企画の意図・編集方針などを含むドイツ語による紹介・解説は，100 年以上にわたり刊行されてきた斯学の最も伝統ある『カント研究』誌に掲載されている。Vgl. Eiji Makino/Kazuhiko Uzawa, Bericht über die japanische Edition von Kants Gesammelten Schriften, in: *Kant-Studien* (Walter de Gruyter, Berlin・New York, 2013: 104 (3), S. 101–109).

(18) これらの課題については，拙著『「持続可能性の哲学」への道』(法政大学出版局，2013 年) の第一章で立ち入っているので，併わせて参照戴きたい。

付記　本稿の執筆にあたり，李秋零・中国人民大学哲学院教授のご協力とご尽力に深く感謝申し上げたい。李教授からは，本稿の執筆に不可欠な翻訳上の基礎資料「康徳哲学」の提供を受けた。また，郝立新・中国人民大学哲学院院長をはじめ，同哲学院の林美茂・副教授，温海明・院長助理の諸氏にも感謝申し上げる。

なお，本研究は，PSPS 科研費 24520029 の助成を受けた研究成果である。

Hosei University Repository

Zur Bestandsaufnahme und Problematik der Übersetzungsgeschichte der Kantischen Philosophie in China

MAKINO Eiji

Zusammenfassung

In diesem Artikel wird ein Teil der bisherigen Forschungsergebnisse zur Rezeptions- und Übersetzungsgeschichte der Kantischen Philosphie in Ostasien vorgestellt, wobei mit Ostasien die vom chinesischen Kulturkreis dominierten Regionen Japan, Korea, China und Taiwan gemeint sind. Zentrales Ziel dieser Forschungen ist es, die dortige Geschichte des Wissens im 21. Jahrhundert mit den wechselseitigen Einflüssen von Naturwissenschaften, Technik und Kultur sowie deren Mechanismen zu erfassen, indem die Modernisierungsprozesse in Ostasien aus Sicht der Übersetzungsgeschichte sowie der unmittelbar damit verbundenen wissenschaftlichen Diskurse einer Neubewertung unterzogen werden.

Der Autor grenzt diesen Artikel zu oben genanntem Forschungsbereich allerdings zunächst auf Beobachtungen zum gegenwärtigen Stand und der Problematik der Übersetzungsgeschichte der Kantischen Philosophie in China ein. In Japan existieren zwar bereits wissenschaftliche Arbeiten, die sich im weitesten Sinne mit der Beziehung von chinesischer Philosophie und europäischen Philosophen beschäftigen. Die meisten dieser Studien gehen jedoch nicht über einen Abriss der chinesischen Philosophie seitens europäischer Philosophen und deren kritischen Beurteilung hinaus, bieten lediglich einen Üblick zu Übersetzungen der klassischen, chinesischen Philosophen, wie Konfuzius oder Laotse, in europäische Sprachen oder haben komparatistische Beobachtungen zu europäischen und den klassischen, chinesischen Philopsophen zum Inhalt. Dem Autor sind zum derzeitigen Zeitpunkt keine Studien bekannt, die als direkte Vorstudien zu dem Thema dieses Artikels gelten könnten. Aus diesem Grund hat es sich der Autor zum Ziel gesetzt, diese Lücke in der Forschung zu schließen. Hierbei versucht er sich aus der Perspektive der Globalisierung des 21. Jahrhunderts mit den zeitgemässen, wissenschaftlichen Methoden seinem Thema anzunähern.

Aus diesem Grund beschränkt sich der Autor auf die Erläuterung der Rezeptionsgeschichte westlicher Philosophie in China, wie sie sich aus der Übersetzungsgeschichte Kantischer Philosophie in China nachzeichnen lässt. Dabei grenzt er sein Beobachtungsfeld auf die Philosophie und das Denken Immanuel Kants als der zentralen Figur der westlichen Philosophie der Moderne sowie seinen immensen Einfluss auf das Denken der Gegenwart ein.

Schlagwörter: Chinesischer Kulturkreis, Kantische Philosophie, Übersetzungsgeschichte, Rezeptionsgeschichte.